研究報告

主体的造形表現が学生たちにもたらすもの

香 月 欣 浩 *

What subjective creative expression brings to students

Yoshihiro Katsuki

本研究では、表現に対して不安や苦手意識を持つ学生が全体の３分の１の人数いることを受け、保育学科に通う学生には苦手意識をなくした後に保育者となってほしいという願いから、「主体的造形表現授業」を行なった。これは幼稚園児、小学生を対象に 21 年間、同授業実践を行ない、その結果子どもたちの苦手意識がなくなる、もしくは薄らいだ経験を持つ筆者の授業実践方法だ。この実践を学生に行なうことにより表現に対する苦手意識はなくならないまでも、薄らぐという仮説を立てた。92 名の学生を対象に造形表現の計画から実行までの全てを自らが行なう「主体的造形表現」を体験させた。その後、アンケート調査より学生の変化を考察した。その結果、主体的造形表現を行なうことによって、自由な発想力や想像力がついたと半数以上の学生が感じているおり、前よりも美術（色や用具、材料、技術、造形や絵画）に興味が湧きましたか？の質問にも８割以上の学生が「はい」と答えている。その他の質問の回答結果からも学生の造形表現への興味関心、心理や考え方の変化が明らかになった。

Key words: 発想力・主体的造形表現・自分で決める・経験主義

Ⅰ．序論

美術を苦手と感じている学生の理由を調査すると「想像力がないから」や「アイデアを出す力がないから」「描くのが苦手だから」「作るのが苦手だから」と感じている者が多い。つまり原因の多くは美術に対する力不足を感じていると言う事ができる。

その一方で自分の好きなことならば、努力を重ね、想像以上の力を発揮する学生の姿を目にすることがある。和久[1]も「やりたいことをやっているときに人間は創造的になります。もっとこうしてみようとか、もっとああしてみようと想像力が働くからです。さらに言えば、想像力を開発するためには自発的にものごとに取り組む意思を育てることが大切です。自発性は自主性を育てます。自主性は主体性の確立に向かわせます。主体性ができてはじめて人間は自立します。」と言っている。つまり自ら関わり、興味を持ったものならば、苦手でも努力し、継続し、やりたいことも増え、力をつけることができるのではないだろうかと考える。

そこで本論では、制作の内容から使用する材料や用具、さらにやり方まで全て学生自らが決めて行なう「主体的造形表現」を授業で実践する。その造形表現による学生の変化を明らかにし、今後の造形表現指導に役立てることを研究の目的とする。

授業計画　第１週：主体的造形表現の説明と計画
昨年度、短大で行なった主体的造形表現の記録画像を学生たちに見せ、計画から実行までのプロセスを説明する。その後、学生は自ら考え計画をたて、次週から行なう内容について指導者と確認する。

第２・３週：制作
指導者と打ち合わせて決まった場所に行き各々が制作をする。

第４週：制作の発表と鑑賞

＊　四條畷学園短期大学　保育学科

自分の制作内容、発見したこと、感じたこと、これからの課題を全員の前で作品を見せながら発表する。その後アンケートの記入を行なう

ルール　することは何でも良いことにすると、過去に成功したことのあるものを繰り返し行い、挑戦することがなくなると予想されるため以下のルールを学生たちに伝えた。

①することを全て自分で決める
②今までに自分が行なったことのない造形表現をする
③今しかできないような規模やダイナミックな造形表現をする

Ⅱ．研究目的

造形表現（すること）・材料・道具・やり方などを全て自分で考え、実行していく「主体的造形表現」を授業で行なうことによって生起する学生の心理、考え方の変化を明らかにする。

Ⅲ．研究方法

1）内容　主体的造形表現を行なった後、アンケート調査をする
2）対象　四條畷学園短期大学保育学科１年生 92 名
3）期間　第１週：2013 年 10 月 28 日、第２週：11 月 11 日、第３週:11 月 18 日、第４週:11 月 25 日

＜計画例＞

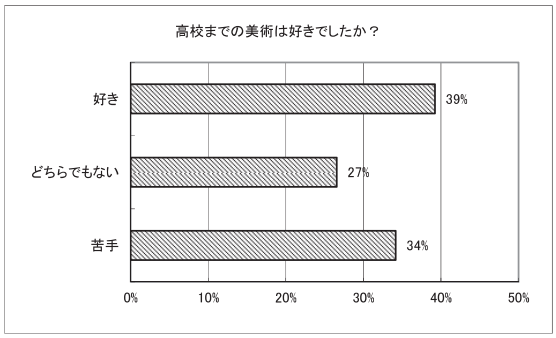
すること	説明
窓ガラスに友達の等身大の絵を描く	ガラスの向こうに立った友達をガラスの手前からなぞるように描いていく
スプレー画	天井から吊った長い紙に向かって 3 色の彩液を入れたスプレーを使って描く
おしゃれな和紙傘	透明のビニール傘に洗濯のりを使って小さくちぎった和紙を貼っていく
傘袋を使用した絵画	傘袋をつなぎそこに絵の具を流し入れ、出てくる絵の具で絵を描く
全身に絵の具を塗りボディーアタックペインティング	雨合羽を着た上から絵の具を全身に塗り、巨大な紙の上に横たわり体の跡を版画のように写し取る

Ⅳ．結果と考察

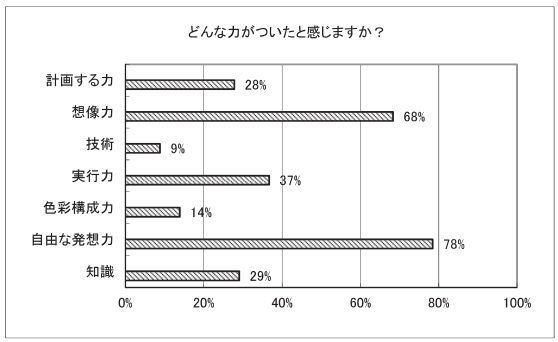
授業後に行なったアンケート内の１）～５）の質問内容と結果を考察していくことにする。（有効なアンケート回答数 84）

1）高校までの美術（絵を描く・ものを作る）は好きでしたか？

この質問に対する学生の答えは「好き」が 39％と最も多く、次いで「苦手」が 34％、「どちらでもない」が 27％であった。「好き」が１番多く、それと同じくらい「苦手」と感じている学生がいることが分かる。



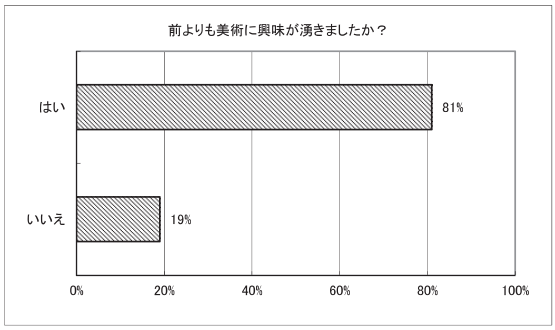
2）主体的造形表現を行なってどのような力がついたと感じますか？（選択複数回答可）
《計画する力・想像力・技術・実行力・色彩構成力・自由な発想力・知識（材料・用具・テクニック・技法）》より選択



「自由な発想力がついた」と感じている学生が 78％、「想像力がついた」と感じている学生が 68％いた。

指導者がすることから材料・用具・方法までほとんどを決めて行なう一斉の制作指導法とは違って、主体的造形表現では、全員することが違い、当然、材料から方法まで異なり、人の真似をすることができない。また完成した見本作品もないので学生が自らイメージして試行錯誤、軌道修正しながら柔軟な発想力を使って制作を進めていく必要がある。

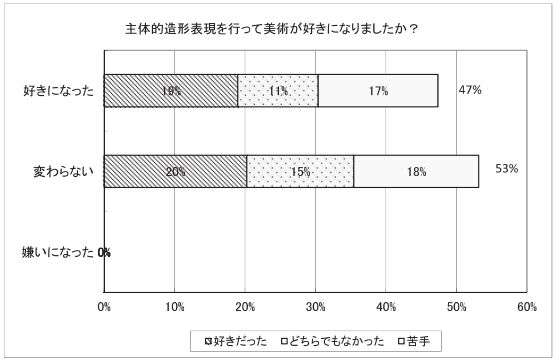
3）主体的造形表現を行なって前よりも美術（色や用具、材料、技術、造形や絵画）に興味が湧きましたか？



この質問に対しては81％の学生が「はい」と答えているように、主体的造形表現を行なうことによって、学生は美術に対する興味が湧くと言うことできる。

興味が湧いた理由が気になるところだが、それは後の自由記述からうかがうことができる。

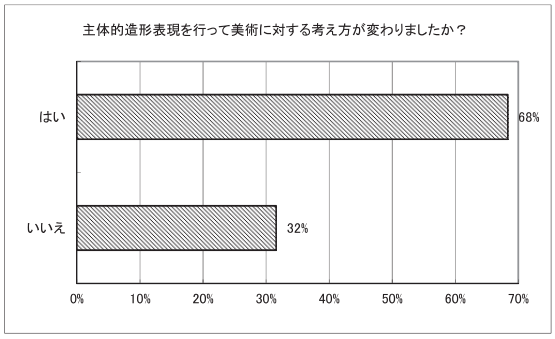
4）主体的造形表現を行なって美術が好きになりましたか？



授業前に行なった「高校までの美術は好きでしたか？」の質問では、「好き　39％」「どちらでもない　27％」「苦手　34％」という結果であった。そして授業後のアンケート結果から主体的造形表現を行なったことによって美術が嫌いになった学生はおらず、「好きになった　47％」と「変わらない　53％」に分かれた。苦手だった者と好きでも苦手でもない者が27％含まれており、主体的造形表現の実践がある一定の効果をもたらしたのではないかと考える。

一方、「変わらない」と答えた学生の中には、授業前に美術が好きでも苦手でもなかった者と、苦手だった者が依然として33％も含まれていることも触れておく。

5）主体的造形表現を行なって、美術に対する考え方が変わりましたか？



上記の5）の質問に「はい」と答えた学生の自由記述を示すことにする。

学生の自由記述

- 高校までは誰が見ても上手な作品だけを求められていたけれど、主体的造形表現は結果だけではなく過程を認めてもらえるので美術が嫌だ、不安だという気持ちがなく授業を受けることができた。
- 先生から「〇〇して下さい」という指示から始めるのではなく、自分で計画して好きなようにするというのが初めてだったので楽しかったです。
- 結果だけでなく過程の中に楽しさがあるということに気付けました。
- 絵は紙の上だけに描くものではなく、何にでも描け、描くものも筆やペンだけではないと思いました。
- 考えてきれいに作ろうと思うのではなく、楽しく作ろうと思い、実際に楽しめました。
- どんなものもアートに変えられる。どんなものも使える。
- 自分の知らない世界が広がった。
- 自分の考えを実行することができ、美術に対して意欲が湧きました。
- 自分で考えて作るので達成感がありました。
- 失敗することで新しい発見があると気づき、思い切りしようという考え方になりました。
- 最初から「作れない」という考え方を変えて、失敗を恐れずに何でもチャレンジしようという考え

方になりました。
・したことのない事をどんどんしようと思ったし、常に疑問を持つことは大事だと気付いた。
・絶対にこうじゃないといけないという考え方がなくなった。
・身近あるものだけでも作ることができると思い、あまり物事を難しく考えないようになりました。
・こんな生き方ができたらいいなあ。

Ⅴ．まとめ

本論では主体的造形表現を行なうことでの学生の変化を論じてきた。

最初にⅣの２）では「**主体的造形表現を行なってどんな力がついた気がしますか？**」の質問に対し、学生の78％が自由な発想力がついたと感じ、想像力においては68％の学生の力がついたこと、またその他の力についても成長（変化）を示すことができた。

2番目にⅣの３）では「**主体的造形表現を行なって前よりも美術（色や道具、材料、技術、造形や絵画）に興味が湧きましたか？**」の質問に対し、81％の学生が前よりも美術に興味が湧いたと答えており、主体的造形表現を行なうことの有益性を示せた。

3番目にⅣの４）では「**主体的造形表現を行なって美術が好きになりましたか？**」の質問に47％の学生が授業前よりも美術が好きになったと答えており、苦手意識のある学生の減少と、好きになった学生の増加（変化）を示した。

最後にⅣの５）では「**主体的造形表現を行なって美術に対する考え方が変わりましたか？またどのような変化がありましたか？**」の質問に対し、68％の学生が考え方に変化があったと回答していた。さらにその変化に対する自由記述を具体的に挙げて示し、学生が何を感じ、考えたのかが明らかになった。

以上のように本研究においては、主体的造形表現を行なうことによっておきる学生の心理や考え方の変化が確認できたと考える。

今後は主体的造形表現の実践を学生に対して引き続き行なっていくとともに、現役の保育者や子どもたちに対しても同じく研究を継続していきたいと考えている。

なお本論は平成26年度全国保育士養成セミナー全国保育士養成協議会第53回研究大会ポスター発表[2]をまとめたものである。

注

1）和久洋三 「子どもの目が輝くとき」玉川大学出版部
2）香月欣浩「思い切りアートが学生を変える」（平成26年度全国保育士養成セミナー全国保育士養成協議会第53回研究大会ポスター発表）

－2015. 2. 2受稿、2015. 2. 2受理－